

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 門脇陽子長老

開 会 招 詞 詩編100編1-5節

* 賛 美 歌 14:1 (ソングシート)

1. ほめたたえよ、つくりぬしを、きよきみまえにひれふし、ささげまつれ、身をも魂をも たぐいなき御名をあがめて。

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 14:2 (ソングシート)

2. くすしきかな、かみのちから、あらぶる波をしずめて、あやうきより御民を守り、この世の悩みに勝たしむ。 アーメン

共同の祈禱 32 定期会員総会主日

教会のかしらイエス・キリストの父なる神さま、きょうは定期会員総会の日です。わたしたちが

キリストの教会に、愛と奉仕と献げものにおいて最善を尽くすことができるように導いてください。

わたしたちの願いや祈りを、わたしたちの無知による求めによってではなく、わたしたちの罪深さが要求することによってでもなく、ただ御心になんか受けて入れてください。アーメン。(マタイ6、1コリント8～9、「誓約」五)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 九州伝道 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 申命記15章7-11節 (旧約聖書305頁)

コリントII8章1-7節 (新約聖書333頁)

説教・祈祷 「御言葉に生きるために」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 28:1-2

1. 主よ、命の言葉を 与え給え、我が身に。我は求む、ひたすら 主より給う 御糧を。
2. ガリラヤにて 御糧を分け給いし 我が主よ、今も活ける 言葉を 与え給え 豊かに。アーメン

* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 66

世をこぞりて、ほめたたえよみさかえつきせぬ、あまつかみを。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 司会古澤兵庫長老・受付雨宮信長老 (次週：門脇献一・古澤兵庫長老)

本日受付 1階：大日南隆夫・大日南信也執事 2階：藤井牧子執事 /ZOOMホスト・録音：森永翔馬

次週 受付 1階：佐藤紀子・古澤迪子執事 2階：大日南信也執事 /ZOOMホスト・録音：門脇光生

コリントII8：1-7「み言葉に生きるために」

パウロとコリントの教会

今日は特に献金との関係でコリント書のこの個所を選びました。コリントの教会と言いますと、なんとなく、色々トラブルが多かった教会の例として取り上げられる傾向があります。それで、牧師が講解説教でコリント書を語ろうと意気込みますと、むむ、先生何かご不満でも、と信徒の方も思わず身構えてしまう、ということがあると、先輩牧師から聞いたことがあります。けれども、当然と言えば、当然ですが、何もコリントの教会が、全員パウロに反対していたとか、いつもとんでもないことをしてかしていた、ということではありません。コリントの教会は教会としてちゃんと運営されていましたし、むしろ、事あるごとに、パウロに手紙を書いて、こういう時はどうしましょうと尋ね、パウロもまた、それはね、というように手紙を返す、というような関係がちゃんとあったのです。確かに、教会を引っ掻き回すような人たちが教会に入り込んで一時期騒然とした、ということもあったようですが、少なくとも、今日の所の一つ前の7章を見ますと、教会に混乱をもたらす人たちは、しっかりと教会の交わりの中で悔い改めをあらわし、この時点ではパウロと教会の間は良い関係であったようです。そして、そのような良い関係の中で、いわば以前から宿題になっていた、エルサレムの教会への献金について語っているのが今日の所です。

アカヤとマケドニア

そのような以前の約束を記しているのがコリントII6章です。まずこちらを読みます。「聖なる者たちのための募金については、わたしがガラテヤの諸教会に指示したように、あなたがたも実行しなさい。わたしがそちらに着いてから初めて募金が行われることのないように、週の初めの日にはいつも、各自収入に応じて、幾らかずつでも手もとに取って置きなさい。そちらに着いたら、あなたがたから承認された人たちに手紙を持たせて、その贈り物を届けにエルサレムに行かせましょう。」(1コリ16：1-3)。この「聖なる者たちのための募金」というのは、この手紙が書かれるよりもかなり前、エルサレムで異邦人に割礼を受けさせる必要があるかどうかで会議が開かれた折、その必要はない、との結論と共に、貧しい者たちのことを心掛ける、という約束をしたところから始まっていました(ガラ2：10)。それは、具体的には、エルサレム教会の貧しい人たちを支える、ひいてはエルサレムとその周辺にある教会とキリスト者を支える、というものでした。先ほどのコリント書の書き方では、ガラテヤの名前が出ていましたが、このコリント第二の手紙では、ギリシャの教会、マケドニア地方のテサロニケ、フィリピ、ペレアの諸教会、そして、アカイア地方というギリシャの南の方にある教会の代表として、このコリントの教会が、このような募金に参加した、その様子が描かれています。そして実は、この募金について最初に話をもっていったのはコリントの教会で、そのコリントの教会が募金を始めた、ということマケドニア州の教会で語った、と今日の聖書の次の章である9章の始めて語られています。

マケドニアの教会について語る

コリントで募金が始まっているから、あなたたちもぜひ、というような勧めをしたらしいのです。ところが、コリントではその後、ごたごたがありまして、募金どころの話ではなくなってしまい、一方、後から始めたテサロニケなど、マケドニアの教会の方ではすっかり募金の準備が整った、という逆転がありました。それで、今日の所では、そろそろコリントでも募金を再開するというタイミングで、このようにあとから募金を始めたマケドニア地方の教会の様子を最初に語りだしているのです。しかし、それはただ、向こうはもうこんな様子だぞ、とってはっぱをかけるというようなことを目指しているわけではありません。そもそも、パウロのこの募金、あるいは一般的な意味での献金についての基本的な姿勢は、3節にある、「力に応じて」ですし、今日の範囲ではありませんが9章に「心に決めた通り」

(7節)とあるように、公平性や自主性を重んじたものです。そのうえで、あえてパウロがマケドニアの話をしているのは、そこにある教会で何が起きているのか、あるいはそもそも、教会とはどのようなところなのか、そこで行われる神さまのお働きとはどのようなものか、それをはっきりさせようとしているからです。それはすでに今日の所の1節の「神の恵み」という言葉に現れています。教会に神様の

恵みがあつたから、良いことがあつたから、それをあなたたちに知らせよう、このように言うのです。

マケドニアの教会とは

所でそのようなマケドニアの教会の基本的な状況として、先ほどお読みしました8章2節ではこうなっています。「彼らは苦しみによる激しい試練を受けていた」。どうも大変だった様子がわかります。ちなみに、マケドニア州にある教会の中で手紙があるのはテサロニケとフィリピです。そこで、テサロニケの手紙を読みます。まず1章です。「そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。」(Iテサ1:6, 7)。これはテサロニケの人たちが信仰をもった時のことです。その時点ですでに、彼らには「ひどい苦しみ」があつたとしています。どうも、このテサロニケの街はかなり貧しかったようです。コリントは逆に裕福な町だったようですが、おそらくテサロニケの教会に集まった人たちは、貧しかったのです。それから、もう一つ別の悩みがあります。これもテサロニケの手紙から確認します。「兄弟たち、あなたがたは、ユダヤの、キリスト・イエスに結ばれている神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちから苦しめられたように、あなたがたもまた同胞から苦しめられたからです。」(同2:14)。そもそも、キリスト教自体が目新しい、他の国の信仰という状態でした。そこで、今までの信仰を捨てて、キリスト者になった時に、周りからだいたいいろいろと嫌な目にあわされた、ということがあつたようです。これは私たち日本のキリスト者にも通じる話かもしれません。

試練はうれしい？

ところが、この二重の苦しみの中で、それをはね返すようなことが起きた、ということを使うのが、先ほどのコリント8章2節の途中の言葉です。「その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しみまず施す豊かさとなった」と続いているのです。この箇所は、実はあまりつながりがよくない翻訳です。特に戸惑うのは、「貧しさがあふれ出て、豊かさとなった」、というつながりぐあいです。なんとなく詩的な気がしなくともありませんが、しかし貧しさがあふれるとはいったい何だろう、と思ってしまう。それで、新しい協会共同訳聖書で読みますと、このあたりのつながり具合が見えてきます。「彼らは苦しみゆえの激しい試練を受けていたのに、喜びに満ち溢れ、極度の貧しさにもかかわらず、あふれるばかりに豊かな真心を示したのです。」。どうでしょうか。苦しみの中で喜びがあつた、貧しかったけれども、豊かにささげものをした、このようなつながりならわからなくともありません。その場合に最も重要なのは、「苦しみの中で喜びがあつた」、というところです。普通に考えますと苦しみに喜びがないのです。しかし、例えばイエス様の山上の説教の冒頭、八つの幸いの言葉の最後は「迫害をされたらあなた方は幸いです。大いに喜びなさい」(マタイ5:11, 12)でした。なぜでしょうか。イエス様は「天には大きな報いがある」と言われました。それで、えー天国で何かいいことが待っているの、と思うかもしれませんが、しかし、そもそも八つの幸いでは天の国はその人のものだ、という言葉が粹になっていました。

喜びがあふれる

そうしますと迫害されているその人の所に天がやってくる、天の国の幸いが、その人にやってくる、ということになるはず。そして、実際の所、先ほど確認しました、テサロニケの教会の人たちには、この意味で、喜びがあつたのです。なぜでしょうか。具体的に何があつたのか、先ほどのコリントの8章2節のことばからはわかりません。わかりませんけれども、おそらく、試練が続く中で、しかも貧しい中で、神様に祈ったことでしょうか。どうしたらいいのですか、ということを経日祈り続けたはず。その中で、少しずつ、具体的な助けが与えられたのではないのでしょうか。そのような祈りは必ずしも、すぐに事態がコロッと改善されることばかりではなかったかもしれません。それでも、教会の中で、一人一人について祈っていく中で、ある時は、一人の人の問題が少し良くなり、ある時には、誰かの必要が満たされ、というように、確かに神様が祈りを聞いてくださっている、ということを経会全体として体験したのだと思うのです。また、そればかりでなく、神様がこの私を見ていて下さる、と

いうことを確信していったのではないのでしょうか。

慈善の業と奉仕

そして、実はこのような体験、神様が祈りを聞いてくださっている、私を見ていて下さる、ということを確認することこそ教会のすべての業の土台になるのです。そこにある喜びこそが尊いのです。その点では、例えば、皆様の中で病が癒された、といったことがあるかもしれませんし、必要が思いがけず満たされた、ダメだと思っていた道が開かれた、ということがあるかもしれません。それ自体も大切な体験ですが、そうして神様と共に歩むという体験そのものが生み出していく信頼、信仰こそ大切です。そのような宝のような体験を私たちは実は、数えてみれば多くいただいているはずなのです。そのような体験の積み重ねを数えていくことによって、本当に「喜びに満ち溢れ」たものとされていくのです。そして、そのような喜びに満ち溢れていたからこそ、マケドニアの人たちは、「あふれるばかりに豊かな真心を示した」のです。それは、自分たちが恵みを受けているというこの事実に基づいて、他者に手を伸ばす、自然にそのようになった、という順番です。4節に「聖なる者たちを助けるための慈善の業」という言葉があります。聖なる者たち、とはキリスト者たちで、より具体的には、エルサレムとその周辺の貧しいキリスト者たちです。しかし、あえて聖なると言うのは、彼らが神様の民だからです。そして、それを助けるとは、神様の業に参加するということです。

み心の通りに

マケドニア州の人たちは、自分達から進んでそれに参加させてほしいと頼んだと続いています。そして、ここに献金の最も大切な姿が現れています。それは、お金をささげること、神様の業に参加していく、ということです。その場合にささげものをする動機は全く、神様によくしていただいた、という満足と感謝です。神さまから良くしていただいた人は、神様にお返しをしたくなります。具体的な神様のお働きに参加したくなります。そうして献金をする時に、この5節で書かれているとおりのことが起きます。すなわち「彼らはまず主に、次いで、神の御心に沿って私たちにも自分自身をささげ」という出来事です。そこで最も大切なのは、「神の御心に沿って」という部分です。神様の業は地上で具体的な形をとるのです。この場合には、教会を支えるための募金でしたが、それ以外にも、教会は様々な神様の御心を地に実現するために立てられています。このような教会の業に自らをささげていく、協力していく、一緒になって教会を立て上げていく、そのような一つの方法として、私たちの献金、ささげ物があるのです。それは、神様の御心を具体化させる積極的な方法です。

み言葉に生きるために

そのように、自らの持ち物をささげること、教会がどうなっていくのか、わたしたちは、期待して待つことができます。それはいい意味で神様を試す、と言えるかもしれません。マラキ書にこんな言葉があります。「十分の一の献げ物をすべて倉に運び／わたしの家に食物があるようにせよ。これによって、わたしを試してみよと／万軍の主は言われる。必ず、わたしはあなたたちのために／天の窓を開き／祝福を限りなく注ぐであろう」（3：10）。十分の一という数字にこだわる必要はありません。私たちはささげものを神様がどのように使ってくださいるか、期待してささげることができます。そのようにして、み言葉の通りに神様の御業がなっていく様子を神様と一緒に生きることができるのです。

祈り

父なる神さま、尊いみ名を賛美します。あなたはわたしたちが祈る前から、私たちに必要な物を知っておられるけれども、しかし、わたしたちが子としてあなたに願うことを待っていて下り、その祈りを喜んで聞いてくださいますから感謝します。あなたは私たちをこの世に遣わし、み心を成し遂げさせてくださいます。私たちはキリストの体である教会として、あなたの栄光を地に表したいと願っております。どうぞこの週もわたしたちがあなたと共に歩み、み旨をなしていけますようにお導き下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン